

メディア社会における建築の象徴性

—桂離宮の写真を通して、時代・思想によるイメージの揺らぎ—

建築学専攻
建築設計研究

MJ23043 かわもと かずき 河本 一樹
指導教員 猪熊 純

第 1 章 本論について

1-1. 研究背景

私たちは、何か抽象的な概念を聞いた時に、頭の中で別の具体的なものや言葉でイメージを補完できる。辞書によれば、以下のように表される。

辞 象徴 symbol：ことばに表わしにくい事象、心象などに対して、それを想起、連想させるような具体的な事物や感覚的なことばで置きかえて表わすこと。また、その表わしたもの。

しかし今日、象徴という言葉自体が象徴的に引用されており、その意味も輪郭もぼやけ、議論の場も消えつつある。

1-2. 研究目的

建築のシンボリズムは古から語られているが、現代では写真や映像といったメディアが、建築物の象徴性を先行して消費している。しかし、建築がメディアを通して人々に認知され、イメージを強固にしていることも事実である。建築の象徴性を扱う論文は多く存在するが、近現代のメディア社会における象徴性を扱う論文はない。そこで本研究は、現代でも通用する建築の象徴性を定義した上で、メディアが補完する「建築の象徴性」を見出すことを目的とする。

1-3. 研究方法

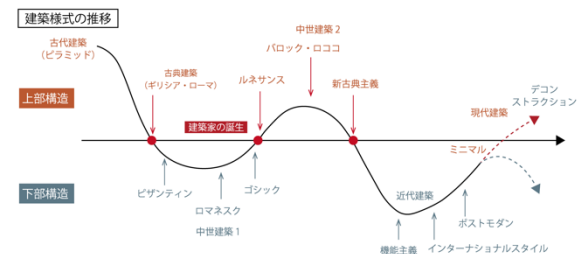
本研究では、同一の建築作品を対象としたメディアに共通して掲載される「建築写真および構図」を分析対象とし、メディアの言説から建築の象徴性の形成過程を明らかにする。第 2 章では、多分野の象徴を比較し、本研究の建築の象徴性を定義する。第 3 章では、建築とメディアの歴史を概観する。第 4 章では、メディア掲載が多い・象徴性の議論がある等から選定した『桂離宮』を対象に建築写真の分析を行う。第 5 章では写真分析を元に、時代や思想で建築がどのような象徴性を形成してきたのか、周囲の言説と共に考察する。第 6 章で結論を示す。

第 2 章 多分野による象徴

記号学を唱えた言語学者フェルディナン・ド・ソシュールは人間の言語活動を「ランゲージュ langage」と名づけ、人のみが持つシンボル化能力であると語った。¹⁾ 一方、同時期にアメリカの哲学者チャールズ・サンダース・パーズは記号論を唱え、観念や習慣が結びつきを作り出した約定性のある記号である、と語り、ソシュールの方がシンボルを広域的に定義した。²⁾

心理学者 CG・ユングは、既知のものの代用ではなく、未知のものを表現しようとし、それ以上適切な表現が考えられない場合、集合的無意識（元型 archetype）から生まれた表現を「象徴」として、記号と区別した。³⁾

社会学者のジャン・ボードリヤールは、人々がものを自己と他者の差異を表す記号と見なしている事を指摘し、商品の価値は機能や有用性よりも、商品に付与された意味にあると語った。⁴⁾ 美術評論家の多木浩二は「その傾向がすでに物をこえて、家あるいは空間にも及んでいる」と語り、現代の消費される建築を指摘した。⁵⁾



[fig.1 建築様式の推移]

古代はピラミッドなど、権力を表す建築が象徴性を持っていた。そこへ信仰や畏怖、思想などが含有され、時代や文化、様式、見る人により、象徴的な建築は異なっていく。(fig.1) そこで、本研究では多分野における象徴の言説を踏まえ、建築の象徴性を、辞書的な意味から逸脱しないように「**抽象的であいまいな事象や心象に対して、建築が同じ具体的なイメージや言葉、形態をもつ**」と定義する。

第 3 章 建築とメディアの歴史

紀元前 20 年頃、建築家 マルクス・ウィトルウィウス・ポッリオが、『建築について』(De architectura) を書き記した。ルネサンス期に活版技術の発展から、建築家 レオン・バティスタ・アルベルティが、ウィトルウィウスの書を復活させた『建築十書』を出版し、ベストセラーとなる。18 世紀、建築物をヴィジュアル化したものとして、木版画が発展した銅版画が生まれる。銅版画家・建築家 ジョヴァンニ・バッティスタ・ピラネージは、『ローマの景観』や『パンテオンのロトンダの内部』など、多くの銅版画を残した。1826 年にフランスの発明家 ジョゼフ・ニセフォール・ニエプスが、カメラ・オブスクラの捉えた写像を金属板に固定することに成功し、建築写真が普及していく。哲学者ヴァルター・ベンヤミンは、建築と大衆の関係が体験から、複製＝再生産という写真へと変容し、写真の方が体験よりもイメージを伝達することに優れる⁶⁾、と指摘した。

第4章 建築写真と象徴性の分析

4-1. 分析対象

分析対象とする建築作品を選定するにあたり、以下の項目から『桂離宮』を選定した。

- ①建築物に対する象徴性の議論があること
- ②建築物の写真がメディアへの掲載が多いこと
- ③日本に存在し、すでに筆者が訪れたことがあること
- ④本来の用途を逸脱し、建築への言説が盛んにあること

『桂離宮』は本来月を見る庭園だが、「簡素な日本建築、日本美の象徴」としてまつりあげられている。

4-2. 分析方法

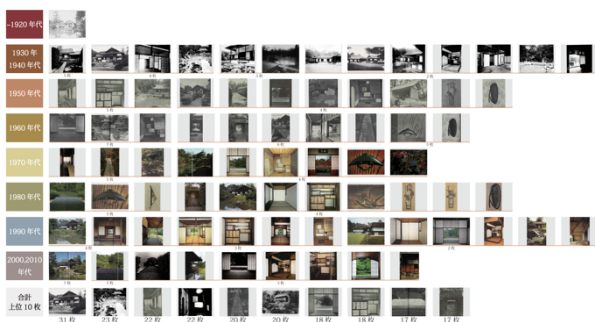


[fig.2 メディアで共通して使用される写真]

インターネットや SNS 等に投稿される写真は個人の特定が不可能であり、投稿されるコメントが話題を呼ぶなど、イメージが拡散される要素が多い。そこで、桂離宮の写真が掲載されている建築系・美術系の写真集、雑誌、書籍のメディアに絞る。計 3342 葉の内、共通して掲載される「建築写真および構図」(fig. 2)を集計する。

4-3. 時代ごとのイメージ分析

集計された桂離宮の写真を年代ごとに重複する上位 10 枚程度抽出し、その傾向を分析する。(fig. 3)



[fig.3 年代ごとの上位の写真]

第5章 象徴性のイデオロギー的考察

5-1. 無名の桂離宮

桂離宮は創建当初から世に知れ渡っていた訳ではない。1883 年に正式に離宮になるが、1877 年地方博、1895 年内国博を経て、桂離宮の知名度が少しずつ高まっていた。

5-2. 技巧美の桂離宮

明治維新後、簡素な意匠を日本的とし、日光東照宮のような華麗な意匠を非日本的、という決まり文句が出来ていた。当時の桂離宮は、風俗史家の若原史明は「【技巧】なイメージが一般に「称されてゐ」た、と語る。⁷⁾

5-3. モダニズムの桂離宮

1930~40 年代の写真は、書院を中心とした水平・垂直的な写真が殆どである。さらに、雁行を撮影した写真が 5 枚も上位を占めており、桂離宮の象徴性が【モダニズム】に変化している。桂離宮とモダニズムへの関連性が議論され始めた矢先に、1933 年 5 月ドイツの建築家ブルーノ・タウトが来日し、自らを「桂離宮の『発見者』」⁸⁾だと語った。タウトという大きな後ろ盾を得て、日本文化論およびモダニズムブームが大きく影響した。

5-4. 簡素美の桂離宮

第二次世界大戦の開始は、機能的で合理的な設計を信条とするモダニズムの理念と呼応する。1942 年に建築家の山田守は、「質素にして簡素な」桂離宮に「大東亜建築の指導理念」を見た⁹⁾、と語った。1930~40 年代に装飾的な写真がないのは、戦時下に求められた【簡素美】が写真にも表れたと考えられる。

5-5. 弥生・縄文の桂離宮

1950 から 1960 年代にかけて、書院よりも庭園や茶室・マテリアルの写真へ割合が傾倒する。1950 年後半、建築家 丹下健三と白井晟一が伝統論争を働きかける。1960 年に丹下が桂離宮を「弥生的な書院と縄文的な茶屋の相互の浸透」¹⁰⁾と語り、1964 年東京五輪に向け、伝統を継いだ国家的建築家像を描いた。写真にも【弥生・縄文】という二項対立が顕著に表れたと考えられる。

5-6. ポストモダンの桂離宮

1970,80 年代の写真は、「市女笠形の把手」など装飾的な写真が上位を占有している。1977 年建築家 内藤昌は桂離宮に「装飾主義」「マニエリスム」¹¹⁾を見出し、1983 年建築家 磯崎新は「不透明な意匠」が「新たな魅力」で「浮上」¹²⁾した、と語る。当時興っていた【ポストモダニズム】的なイメージに偏っていた、と考えられる。

5-7. 回帰する桂離宮

1990,2000 年代以降は水平・垂直に縛られないシークエンスやフレーミングなど、空間構成的な写真に回帰した。1991 年建築家 黒川紀章は桂離宮を引用し、『花数寄』を提唱した。2005 年中谷礼二による「桂の道行き」分析や、2018 年、桂の平面を回転した畑友洋設計の『円側の家』などプロセス・ダイアグラムの解釈も行われる。

第6章 総論

時代ごとの社会背景や建築家の思想により、桂離宮の象徴性が【技巧美】【モダニズム】【簡素美】【弥生・縄文】…と変容し、メディアが建築の象徴性を補完していることを論証した。

参考文献

- 1) 丸山圭三郎『ソシュールを読む』講談社.2012.p.253
- 2) 有馬道子『パースの思想 記号論と認知言語学』岩波書店.2001.p108-136
- 3) C.G. ユング (林道義訳)『タイプ論』みすず書房.1987. p508-509
- 4) ジャン・ボードリヤール『消費社会の神話と構造』紀伊國屋書店.2015.p68
- 5) 多木浩二『生きた家-経験と象徴』岩波書店.2001. p123
- 6) ヴァルター・ベンヤミン.浅井健二郎編訳『写真小史』『ベンヤミン・コレクション I』、ちくま学芸文庫.1995.p575
- 7) 若原史明『桂離宮記・四』『風俗研究』清文堂出版. 1931 年 12 月号. p18
- 8) ブルーノ・タウト、篠田英雄訳『日本・タウトの日記』岩波書店. 1975
- 9) 山田守『大東亜建築の指導理念』『建築雑誌』日本建築学会. 1942 年 9 月号. p648
- 10) 『桂：日本建築における伝統と創造』著者 ヴルター・グロピウス、丹下健三、石元泰博 出版者 造型社. 1960
- 11) 内藤昌『桂離宮』講談社. 1977. p351-353
- 12) 磯崎新『桂離宮-空間と形』岩波書店. 1983. p17-18